日本英文学会 中国四国支部
第 69 回大会
プログラム・梗概

会期：平成 28 年 10 月 29 日（土）、30 日（日）

会場：愛媛大学　城北キャンパス
〒 790-8577　愛媛県松山市文京町 3

日本英文学会中国四国支部 事務局
〒 734-8558　広島県広島市南区宇品東 1-1-71
県立広島大学広島キャンパス　栗原武士研究室内
TEL082-251-9954

第一日　10 月 29 日（土）（参加受付 12 : 30 －）

開会式・総会（12 : 45–13 : 15　共通講義棟 C2 階　EL26 教室）

（司会）愛媛大学教授　加藤好文

開会の辞　日本英文学会中国四国支部支部長　高橋渡

挨拶　愛媛大学学長　大橋裕一

総会

研究発表（13 : 30–16 : 40）

第 1 発表　13 : 30–14 : 10　　第 2 発表　14 : 15–14 : 55

第 3 発表　15 : 15–15 : 55　　第 4 発表　16 : 00–16 : 40

第 1 室（共通講義棟 C2 階　EL21 教室）

（司会）広島大学名誉教授、福山大学教授　中尾佳行

1. 法表現から探る人物描写
   —オースティンの『エマ』を中心に—
   弓削商船高等専門学校講師　石田紗瑛
2. 『パストン家書簡集』における義務の法助動詞
   —shall を中心に—
   尾道市立大学准教授　平山直樹
   （司会）鳥取大学講師　中尾雅之
3. ヴァージニア・ウルフの長編小説における不定代名詞 One の使用と推移：
   Voyage Out から *Between the Acts* まで
   広島大学大学院博士課程後期　浅香加奈子
   （司会）広島大学教授　今林修
4. 【招待発表】身体表現から見た Dickens の言語と文体
   安田女子大学教授　髙口圭轉

第 2 室（共通講義棟 C2 階　EL22 教室）

（司会）広島大学准教授　榎田一路

1. 読みの楽しさを実感しつつ読解力向上を図る
   —母語としての英語教育実践「文学ワークショップ」を手掛かりに—
   広島大学教授　小野章
   （司会）大阪市立大学名誉教授　山崎弘行
2. 『鈴つき帽子』におけるキーツの挑戦
   —‘gradus ad Parnassum Altissimum’ を目指して—
   広島大学・松山大学非常勤講師、広島大学大学院博士課程後期　児玉富美恵
   （司会）関西学院大学准教授　竹山友子
3. *Tottel's Miscellany* における Thomas Wyatt 作品を読み直す
   広島工業大学准教授　楠木佳子
4. 【招待発表】カルペ・ディエムの諸系譜
   ——Andrew Marvell, “To His Coy Mistress” を読み直す——
   フェリス女学院大学教授　冨樫剛

第３室（共通講義棟 C2 階　EL31 教室）

（司会）県立広島大学教授　高　橋　　渡

1. 帰ってきた緑の瞳の男
——Jane Urquhart, *Away* におけるアイルランド大飢饉と人種的記憶
安田女子大学准教授　田多良　俊　樹

2. エマ・ドナヒューのレズビアン演劇
九州産業大学教授　河　野　賢　司
（司会）広島大学准教授　倉　田　賢　一

3. 【招待発表】トマス・バーク『ライムハウスの夜』
——中国人移民と異人種混淆
大阪市立大学教授　田　中　孝　信

4. グレアム・グリーンと冷戦下のキューバ
—*Our Man in Havana* を中心に
四国大学教授　阿　部　曜　子

第４室（共通講義棟 C3 階　EL32 教室）

（司会）海上保安大学校講師　真　野　　剛

1. 青いノートブックを超えて
—Paul Auster, *Oracle Night*（2003）のメタフィクション性
岡山大学教授　中　谷　ひとみ

2. アメリカのコミックブック焚書が示す新たな白人の誕生
安田女子大学講師　島　　克　也
（司会）広島経済大学准教授　本　岡　亜沙子

3. メルヴィルと民主主義：
二枚折り絵的作品（小説・詩）におけるトランスアトランティックな視点から
松山大学教授　辻　　祥　子

4. （発表なし）

特別講演（17 : 00–18 : 00　共通講義棟 C2 階　EL26 教室）

（司会）広島大学教授　新　田　玲　子

演題：　Don’t Shoot the Translator
講師：　翻訳家・法政大学教授　金　原　瑞　人

懇親会（18 : 30–20 : 30）

（司会）松山大学教授　辻　　祥　子

会場：　いよてつ会館　クリスタルホール（5 階）
会費：　事前 Web 申し込み 5,000 円（当日申し込みは 6,000 円）
※日本英文学会中国四国支部 HP よりお申し込みください

第二日　10 月 30 日（日）

シンポジアム（10 : 00–13 : 00　共通講義棟 C2 階　EL26 教室）

題目：　Kazuo Ishiguro 再考——さらなる解釈の可能性を求めて

The Buried Giant における Ishiguro 文学の継承と発展

（司会・講師）　山口大学教授　　池　園　　宏

“not told and told” から “told and not told” へ：
「語られること」と「伝わること」の間

（講師）鳥取大学准教授　　長　柄　裕　美

Never Let Me Go にみる疑似イングリッシュネス
——小説とヘリテージ映画を読む / 見る——

（講師）西南学院大学教授　　金　子　幸　男

Ishiguro 作品における「アート」の役割

（講師）千葉工業大学准教授　　三　村　尚　央

閉会式（13 : 00–　共通講義棟 C2 階　EL26 教室）

（司会）愛媛大学教授　　竹　永　雄　二

閉会の辞　　日本英文学会中国四国支部副支部長　　吉　中　孝　志

第一日

── 研　究　発　表 ──

法表現から探る人物描写
―オースティンの『エマ』を中心に―

弓削商船高等専門学校講師　石田紗瑛（いしだ さえ）

ジェーン・オースティンの小説では、*must, have to, ought to, should* などの義務を表す法助動詞が頻繁に用いられている。その義務の種類には、松谷（2000 : 65）が分析するように、小説世界の時代背景や社会的背景から生じるマナーや礼節などに基づくものと、登場人物の心理や感情・人間性が表出したもの、という 2 つの場合がある。義務を課す人物の真意は、義務の源となる動機づけや、話し手と聞き手の人間関係など、さまざまな要素の関係の中で考察されるべきであり、義務を表す法助動詞の使い分けや義務づけの動機を探ることは、登場人物の道徳観・価値観に迫ることへと繋がる。

また、オースティンの作中では、Lexical Modality（Preisler : 1986）、すなわち *I think, I suppose, I believe, I am sure* などの主観性を表す表現や、*certainly, probably, perhaps, possibly* などの法副詞が、しばしば法助動詞と共起しており、その法表現の重層構造は単体の法表現だけでは表すことのできない話者の複雑な心理を効果的に描き出している。

本発表では『エマ』（*Emma* 1816）を題材に、オースティンが法表現の重層構造と、義務に関わる法助動詞をどのように作中で用いているかを示す。そして、語り手による心理描写や登場人物の会話・思考において、どのように人物描写に作用しているかについて考察する。

『パストン家書簡集』における義務の法助動詞
―shall を中心に―

尾道市立大学准教授　平山直樹（ひらやま なおき）

15 世紀を代表する書簡集『パストン家書簡集』には、通常の家族間での手紙をはじめ、覚書（memorandum）、契約書（indenture）、および嘆願書（petition）など、様々なジャンルの文書が含まれている。特に契約書において、法助動詞 shall は「～するものとする」と、確定事項を明確に表すための義務意味で使われている。

本発表においては、このような義務意味の shall が本書簡集においてどのような分布を示しているかを、義務を表す法助動詞 must、および擬似法助動詞 ought to とも比較しながら、検証する。また、これにより、15 世紀における shall の意味と用法の発達の度合いの一端を明らかにする。

その際、法助動詞 shall の意味が、使用される環境により変化することを考慮して、文法化（Hopper and Traugott : 1993）、および主観化（Traugott : 1995）の理論を基盤とする。具体的には、主語の人称や動詞の時制・相など命題内容条件、主節や従属節など shall を含む節のタイプの条件、そして、送り手と受け手の関係や文書のジャンルなど社会言語学的条件をそれぞれ設定して検証する。

なお、本発表においては Norman Davis 編集（1971）の *Paston Letters and Papers of the Fifteenth Century* の第 1 巻を調査対象とする。

ヴァージニア・ウルフの長編小説における不定代名詞 One の使用と推移：*Voyage Out* から *Between the Acts* まで

広島大学大学院博士課程後期　浅香加奈子（あさかかなこ）

本発表ではヴァージニア・ウルフ（1882–1941）の長編小説 9 作品を通して不定代名詞 one の人称代名詞としての使用に注目し、その使用の特徴と頻度の推移を比較考察する。One が人称代名詞としてウルフの作品内に使用されていることについては、作者の意識の流れ技法の一つであることが示唆されてきた。本研究では、その技法としての one の役割と効果を narratology の枠組みの中で検証することが目的である。

長編として 7 番目に出版された *The Waves*（1931）を除いて、ほかの 8 作品は三人称の語りで描かれている。どの作品にも one の使用はあるが、その使用が顕著に多いのは、ウルフが意識の流れを描いた代表的な作品とされている、*Jacob's Room*（1919）、*Mrs. Dalloway*（1925）、*To the Lighthouse*（1927）の 3 作品である。これらの作品内での one の使用は、特に free indirect thought で多く見られ、初期の作品での one は、主に direct speech での使用が多いことなど、one の使用方法に違いが認められる。作品間での使用頻度や用法を比較し、特に one が thought/speech representation の中でどのように使用されているかについて考察する。

また、one の使用頻度および傾向を direct speech の中での一人称代名詞 I の使用と比較する。I の使用は一人称の語りである *The Waves* において最も多く、同時に one の減少が観察される。反対に one を一番多く使用している *To the Lighthouse* では、I の使用が最も少ない。それぞれの使用を具体例とともに考察し、one の使用の効果について考える。

身体表現から見た Dickens の言語と文体

安田女子大学教授　髙口圭轉（こうぐちけいすけ）

Korte は、その著 *Body Language in Literature*（1997）において、文学における身体表現の分析の枠組みを示すとともに、Dickens の作品における身体表現の重要性および特質に焦点をあてている。また、Mahlberg は、*Corpus Stylistics and Dickens's Fiction*（2013）において、コーパス言語学の手法を用いて、繰り返し使用される身体表現と登場人物との関係を探っている。

本発表では、Dickens の作品の中で、face, hair, eye, hand などの身体の部位を表す語の中でも、特に使用頻度が高い hand と共起する語句や hand を伴う身体表現に注目し、Dickens が人物描写においてどのような表現技巧を用いているのかを明らかにしたい。また、身体表現は、特徴的な人物描写や登場人物の心理描写に役立つだけでなく、繰り返し使用され、場面を生き生きと描写し、視覚的に具体化するのに役立つような効果もある。発表ではそのような効果にも言及してみたい。分析に際しては、Dickens の作品を集めたコーパスだけでなく、19 世紀の他の英国作家の作品のコーパスとともに、故山本忠雄博士のカードを基にして現在作成中の *The Dickens Lexicon Digital*（DLD）も活用していきたい。

読みの楽しさを実感しつつ読解力向上を図る
―母語としての英語教育実践「文学ワークショップ」を手掛かりに―

広島大学教授　小野（おの）　章（あきら）

本発表の目的は、母語としての英語教育を手掛かりに、日本において文学を英語教育に活用する方法を探ることである。Sheridan D. Blau はその *The Literature Workshop*（2003）の中で、英語を母語として教える環境下における文学のあり方を理論面、実践面から論じている。同書は、全米英語教員協議会（National Council of Teachers of English）によって優れた英語教育の研究に与えられる Richard A. Meade Award も受賞している。Blau が唱える「文学ワークショップ」は、英語を母語とする学習者を想定したものではあるが、難解な文学解釈等を前提とはしていない。文学作品中の言語に着目させながら、学習者の反応や解釈を促すという「文学ワークショップ」の特長は、日本の英語教育においても楽しみながら読解力を付けることにつながるのではあるまいか。誤読の問題、学習者自身による解釈、初読と再読の関係、教師の役割等についても触れながら、L2 環境下における「文学ワークショップ」のあり方を考察したい。

『鈴つき帽子』におけるキーツの挑戦
―‘gradus ad Parnassum Altissimum’ を目指して―

広島大学・松山大学非常勤講師、広島大学大学院博士課程後期　児玉（こだま）　富美恵（ふみえ）

ジョン・キーツ（John Keats, 1795-1821）は、過去の偉大な詩人たちを模範として詩的成長を遂げてきた。エドマンド・スペンサー（Edmund Spenser, 1552?–99）は、キーツが関心を抱いた最初の詩人と言える。彼が世間に公表した初めての作品は「スペンサーにならいて」（‘Imitation of Spenser’, 1814）であり、『妖精の女王』（*The Faerie Queene*, 1589–96）で用いられているスペンサー連で書いた、文字通りスペンサーの特徴を踏まえた作品である。キーツはこのあと、物語詩『聖アグネス祭の前夜』（*The Eve of St. Agnes*, 1819）と風刺詩『鈴つき帽子』（*The Cap and Bells*, 1819）の二作品においてのみ、スペンサー連を用いている。未完となった『鈴つき帽子』であるが、キーツは書簡の中で『鈴つき帽子』が「最も高いパルナッソス山の階梯」（‘gradus ad Parnassum altissimum’）になるだろうと示唆していることから、キーツの『鈴つき帽子』に対する思い入れは大きかったと推測できる。

本発表では、顧みられることの少ない作品である『鈴つき帽子』に注目する。これは先輩詩人たちの詩的技巧や思想を学んできたうえでのキーツの晩年の作品である。キーツがスペンサー連で書くことの意義を考察しながら、『鈴つき帽子』の再評価を試みたい。

Tottel's Miscellany における Thomas Wyatt 作品を読み直す

広島工業大学准教授　楠木（くすのき）　佳子（よしこ）

1557 年、『トテル詩選集』*Tottel's Miscellany* がロンドンの出版人 Richard Tottel によって出版された。Thomas Wyatt（1503–42）を始めとするエリザベス朝の詩作品が収められたこの詩選集については、先行研究の多くが個々の詩人または作品に注目し、詩作の時代、すなわちヘンリー八世期のチューダー朝政治や宮廷文化、社会的背景を足掛かりとして解釈を行ってきた。編纂された作品の多くは愛をテーマとし、「恋する人（“the lover”）」という文言が入ったタイトルが編集の段階で付されている。ペトラルカの恋愛詩が翻訳、模倣の枠を超えて変容しながら取り入れられていく過程を、読

む者は楽しんできた。

近年、この詩選集に関する複数の論考が相次いで発表されている。中でもスティーブン・ハムリック編集の *Tottel's Songes and Sonettes in Context* には、異なるアプローチでこの詩選集を読みなおす8編が収録され、必ずしも共通の立場に収斂されない多様な批評的見解は、我々に今なお幅広い解釈の可能性を示唆するものである。

本発表では本詩選集に収録された Wyatt の作品群に注目し、それらを 1557 年のイギリスという、Wyatt が実際に詩作を行っていた時期とは異なる時代的コンテクストに位置づけたい。そのうえで、それらが『トテル詩選集』という新たな文脈の中で持ちえた意味とは何なのかを再考する。

カルペ・ディエムの諸系譜
――Andrew Marvell, "To His Coy Mistress" を読み直す――

フェリス女学院大学教授　富樫（とがし）　剛（ごう）

カルペ・ディエムの主題を扱うイギリス詩のなかで特に評価・人気の高いアンドリュー・マーヴェルの「恥じらいためらう、わたしの愛しいご主人さまに」("To His Coy Mistress") であるが、この主題に関する従来の理解が不十分であるがゆえに、歴史的に正しく読まれてきたとはいいがたい。"Carpe diem" とはホラティウスのオード 1.11 からのフレーズであるが、この主題が彼ではなくオウィディウスやロンサールらの作品を通じてイギリスに導入されたこと、このフレーズの定着が 19 世紀以降の現象であることなどは、あまり知られていない。16–17 世紀にこの主題が流行した理由もいまだ明確ではない。本論考では 16–17 世紀イギリスにおけるカルペ・ディエム詩の諸系譜を文学史・社会史的に整理することにより、またこれら諸系譜の作品をマーヴェルがどのように援用・変奏しているか精査することにより、「恥じらいためらう、わたしの愛しいご主人さまに」について歴史的に正確な新読解を提示したい。特に強調したいのは、内乱・共和国期の詩に見られる「時間」に対する執着である。内乱・王の処刑という国家の激震をもたらした黙示録的終末論との関係においてカルペ・ディエムの主題の政治性・社会性を明らかにすることにより、当時の詩人たちが共有していた問題意識を掘りおこすことができればと思う。

帰ってきた緑の瞳の男
――Jane Urquhart, *Away* におけるアイルランド大飢饉と人種的記憶

安田女子大学准教授　田多良（たたら）　俊（とし）　樹（き）

アイルランド系カナダ人作家 Jane Urquhart（1949– ）の小説 *Away*（1993）は、主人公 Esther O' Malley Robertson の母方 3 世代の歴史を描いている。曾祖母 Mary は、北アイルランドの孤島で民間伝承の再現のような不可思議な体験をし、結婚後に移住したカナダで忽然と姿を消す。残された娘（すなわち Esther の祖母）の Eileen は、父の影響でアイルランド民族主義を奉じるようになり、モントリオールのアイルランド系貧民街の青年と恋に落ちるも、彼が反民族主義者であると知って別離し、Deirdre という乳児を兄夫婦に託す。この乳児が Esther の母である。

この 3 代記は、もとは祖母 Eileen が孫の Esther に話して聞かせた物語であり、Esther がこれを文章にまとめるために反芻するという体裁で *Away* という小説は展開していく。このように重層的な伝聞と回顧とによって構成され、複雑な入れ子構造を有する *Away* は、それゆえ、カナダ・ポストモダン小説の代表例として読まれることが多かった。

しかし、本発表は、曾祖母 Mary がカナダに移住した理由がアイルランド大飢饉であるという点に注目している。Urquhart と同様、Esther もまた大飢饉移民の末裔なのである。実際、大飢饉は、Mary の物語の背景として直接言及されるだけでなく、Eileen から Esther に至るまでの各世代の物語においても間接的に描かれ続けている。本発表では、このような大飢饉表象を分析し、*Away* における大飢饉が「人種的記憶」（racial memory）として機能していることを指摘する。

エマ・ドナヒューのレズビアン演劇

九州産業大学教授　河野賢司（こうの けんじ）

アイルランドのダブリン生まれでカナダ在住の作家エマ・ドナヒュー（Emma Donoghue, 1969-）は、同性愛を主題とする数編の小説を発表しているが、映画化された『ルーム』（*Room*, 2015）の脚本も手掛けるなど、他のジャンルにも執筆の幅を広げている。本発表ではドナヒューの演劇作品5編の中から、不当解雇に単独ピケで抗議する料理人と同窓の婦警との交流を描く1幕劇『迷いながら死ぬのはお止し』（*Don't Die Wondering*, 2005 初演）、19 世紀末ごろにニュー・ヨークのヴォードヴィル演劇で活躍した男装女優アニー・ヒンドル（Annie Hindle）を扱う2幕劇『紳士淑女の皆さま』（*Ladies and Gentlemen*, 1996 初演）、ヨークシャーのハリファックスに実在し、400 万語の暗号手記を残したアン・リスター（Anne Lister, 1791–1840）とその恋人の女性たちのレズビアニズムの葛藤を描いた2幕劇『自分自身の心は分かっている』（*I Know My Own Heart*, 1993 初演）、さらには復活祭蜂起で降伏文書を送達しながら記録写真から抹消（*"Eirebrushed"* [*sic*]）されたエリザベス・オファレルのモノローグ（*Signatories* [2016] 所収）を取り上げ、エマ・ドナヒューが提起するレズビアニズム擁護の姿勢を考察してみたい。

トマス・バーク『ライムハウスの夜』――中国人移民と異人種混淆

大阪市立大学教授　田中孝信（たなか たかのぶ）

ロンドンは移民抜きには語れない。19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけて大英帝国の版図の拡大に伴い、多くの中国人がイースト・エンドに移り住み「チャイナタウン」を形成した。それは小さな空間だったにもかかわらず、阿片戦争以来のイギリス側の中国に対する罪悪感ゆえに、そこを起点とした逆侵略の恐怖は、イギリスの中国における権益拡大と表裏一体の形でいや増す。イースト・エンドが帯びる犯罪や堕落が極悪な中国人像の確立に寄与するのである。バリー・ミリガンは『快楽と苦痛』（1995）の中で、阿片によって中国人化するイギリス人の身体や心的態度に焦点を当て、オリエントを「嫌悪の魅力」を持つ他者と位置づけた。しかし同時に私たちは、当時、中国人男性と白人女性との性的関係が大きな問題となっていたことを忘れてはならない。この男女間の異人種混淆に対して、中・上流階級はどういう態度を示したのだろうか。「棄却すべきもの」という、単に一方的・単層的なものだったのだろうか。本発表では特に、「オリエンタルなロンドン」の神秘と危険を利用して一種のオリエンタル・ゴシックを創り出したトマス・バークの短編集『ライムハウスの夜』（1916）を取り上げることで、中国人男性と白人女性の関係を、その多様性に着目しながら捉える。セクシュアリティの扱いの点での規範からの逸脱・異質性を明らかにし、作者の意図するところや作品の持つ同時代的意義を探ってゆきたい。

グレアム・グリーンと冷戦下のキューバ —*Our Man in Havana* を中心に

四国大学教授　阿部曜子（あべようこ）

一般的な文学史においては依然として「カトリック作家」として位置づけられることの多いGraham Greeneであるが、その死後、注目を浴びつつあるのは、20世紀という激動の時代を駆け抜けたこの作家の、エスピオナージを巡っての謎に満ちた人生の側面や、時に辛辣、時に機知に富んだ数々の政治的言説である。作品や新聞・雑誌等のメディアを通して我々に投げかけてくるグリーンのポリティカルなメッセージは、反米的色調に彩られながらも、彼が時代の先を見据えた鋭い慧眼の持ち主であることを如実に示している。独裁政権下のキューバを舞台とした *Our Man in Havana*（1958）もその一つであり、第二次世界大戦時の英国諜報部員としての経験に着想を得たというこの作品は、その後の世界情勢を予見する、他に類を見ない冷戦風刺文学である。1950年代後半、朝鮮戦争を経て明確化・固定化されつつあった冷戦構造の中、アジアや南米の第三世界に触手を伸ばす米ソ二大陣営の狭間で揺れ動くキューバ。不安定な状況下にありながらも、この作品が書かれた時は、カストロによる革命も起こっておらず、その3年後に人々を震撼させたキューバ危機で、このカリブ海の小国が世界中の耳目を集めることになるとは誰しも予想しなかった。緊張をはらんだ当時の歴史的状況を辿りながら、グリーンがその前後に寄せた新聞記事や一連の対談などと合わせ *Our Man in Havana* を再検証・再吟味し、冷戦時代における一つの文学の在り方を示していきたい。

青いノートブックを超えて
—Paul Auster, *Oracle Night*（2003）のメタフィクション性

岡山大学教授　中谷（なかたに）ひとみ

オースターは「前作 *The Book of Illusions*（2002）が交響曲だったとすれば、本小説は弦楽四重奏と言ってよい」と語る。確かに、スケールが大きい前作と比べれば小ぶりで、生死の境を彷徨った病み上がりの主人公が夫として、そして小説家として再生を図ろうとする、1982年9月、ニューヨークでの9日間の出来事である。しかし、様々な物語内物語が複雑かつ緊密に絡みあいながらストーリーが展開するさま、本文と脚注などで構成されるテクスト模様、小説・虚構、3Dビューアー、プロパガンダ、新聞ジャーナリズム、映画脚本など様々な表現メディアへの言及、電話帳で表象される時空間の歴史言説と現実と虚構、語り手が物語を得ていく過程、言語が物事を引き起こし、現実を作り出すという、言語のperformativityをめぐる議論など、様々なメタフィクション性の饗宴を見ると、この小説の方が交響曲だと言いたくもなる。

小説の終末で主人公は、人生（life）も物語も自分の書く小説も、始まったばかりだと語る。青いノートブックを破棄し、生きる上でも書く上でも愛というテーマを見出したようである。オースター自身、以後、メタフィクションから離れ、愛が主要なテーマの小説を書くことになる。『オラクル・ナイト』は彼のメタフィクションの帰結と、愛というテーマへの移行という点から、オースター世界の理解を深める重要な小説と評価できる。

アメリカのコミックブック焚書が示す新たな白人の誕生

安田女子大学講師　島（しま）　克也（かつや）

1933年5月のドイツにおいて、図書館から押収されたさまざまな「非ドイツ的」書物が、公衆の面前で焼却処分された。「ナチスの焚書」（Nazi book burnings）として知られるこの事件は、映画『インディ・ジョーンズ / 最後の聖戦』（*Indiana Jones and the Last Crusade,* 1989）にも登場しており、ファシズムを象徴する行為として有名であるが、それから22年後のアメリカでも同様の焚書が行われている。この時に燃やされたのは『資本論』ではなく、当時、黄金時代を迎えていたコミックブックだった。PTA・教育委員会・在郷軍人会の婦人部会・宗教界に属する大人達は、コミックブックを青少年の健全な精神を損なういかがわしいメディアと捉え、アメリカ社会から一掃しようと画策しており、彼らは青少年達にコミックブックを捨てさせる一方で、ハードカバーの児童文学を与え、その精神を浄化しようとしたのである。

本発表では、1940年代から1950年代におけるコミックブック出版業界に対する規制と、その規制に深く関与した従来の出版業界の関係を調査することによって、コミックブックの焚書は、第二次世界大戦後のアメリカ社会が新たな人種区分を導入し、新たな「白人」が支配する社会へと変貌した瞬間に発生したということを見いだしたい。

メルヴィルと民主主義：
二枚折り絵的作品（小説・詩）におけるトランスアトランティックな視点から

松山大学教授　辻（つじ）　祥子（しょうこ）

この発表では19世紀半ばにハーマン・メルヴィルがイギリスとイタリアに渡り、大西洋の両側で問題となっている自由・平等・民主主義の危機を強く意識し、二枚折り絵のように二つで一対をなす小説（創作時期1850年代前半）と詩（創作時期1860–70年代）にその見解を示していることに注目したい。メルヴィルはマーガレット・フラーが現地から送った特派員報告の影響を受けていると考えられるが、両者の見方は違っている。

当時の英米両国の課題として、貧富の差の拡大、貧困者の救済があった。メルヴィルは、イギリスの富者とアメリカの貧者が、英米にまたがって存在する産業構造の中で結びついていることに気づいている。また、当時イタリアでは列強による支配から独立を求める、所謂イタリア革命の動きが盛んになっていたが、その状況は同じような革命を経験し、なおかつ奴隷制廃止という新たな課題に直面していたアメリカ国民の大いなる関心事となっていた。メルヴィルは革命の意義は十分理解していたが、徐々にその暴力性に疑問を持つようになり、詩の中では革命の英雄ガリバルディをあえて「ドンキホーテ的人物」として描写している。

これまでメルヴィルの小説と詩は別々に論じられてきたが、両方を扱うことで、この作家が個人や国家の解放、民主主義の実現といった大きなテーマを常にトランスアトランティックな視野をもって追究してきたこと、その際、二枚折り絵的手法が有効であったことを明らかにしたい。

第二日

―シンポジアム―

Kazuo Ishiguro 再考 ――さらなる解釈の可能性を求めて

Kazuo Ishiguro が第一作目の長編 *A Pale View of Hills*（1982）を発表して早くも 34 年になる。これまで出版した長編小説は 7 冊にのぼり、数々の文学賞受賞歴も相まって、Ishiguro の評価や執筆作品の持つイメージはほぼ定まっているかのように思える。だが、Ishiguro は存外にアグレッシブな作家である。昨年は *Never Let Me Go*（2005）以来 10 年ぶりとなる新作 *The Buried Giant*（2015）を発表し、それまでとは異なるファンタジー的要素を前景化することにより、賛否両論を含めて世間を驚かせた。振り返れば、三作目の *The Remains of the Day*（1989）でブッカー賞を受賞した後も、周囲の予想や期待に反して *The Unconsoled*（1995）という型破りなシュールレアリスム的作品を世に問うてみせていた。Ishiguro は、その表立ったイメージに反して、一つの文学的範疇やスタイルに容易に収まろうとしない作家なのである。このような作家の作品に対し、読み手の解釈もまた多様で発展的なプロセスを求められることになろう。そして今、新作の記憶も新しい時点で、改めて Ishiguro 文学に向き合い、さらなる解釈の可能性を模索することには意義があると思われる。本シンポジウムでは、講師陣が各々独自の観点から代表的な作品の数々に改めて光を照射することで、Ishiguro の文学世界が持つ奥行きや多面性を浮き彫りにできればと思う。

The Buried Giant における Ishiguro 文学の継承と発展

（司会・講師）山口大学教授　池園（いけぞの）　宏（ひろし）

シンポジウム全体への導入として、まずは司会者が最も新しい長編 *The Buried Giant* を題材にとり、Ishiguro 作品の現在について考察する。アプローチのための着眼点として、それまでの作品群、とりわけ前作 *Never Let Me Go* を中心に取り上げ、本作との接点や差異について検証する。近未来的現代を舞台にしたサイエンスフィクション *Never Let Me Go* と太古を舞台にしたファンタジー的小説 *The Buried Giant* は一見関連性が乏しく、それぞれが異なる文学的ベクトルを示しているように思われるが、後者は前者の主題やメッセージを内包、継承し、かつそれらが発展的に提示されている点を見ていきたい。その過程で、記憶や歴史を巡る問題など、Ishiguro 作品の常套手段と考えられている諸点やその変容についても目配りすることになるだろう。結果として、Ishiguro が過去の作品に見られる主題や手法を踏襲しつつも、さらなる進展を模索し続けている有様を提示できればと思う。また、可能であれば、他の講師陣によって提示される種々の視点も念頭に置き、それらと本作品との直接間接的な関連について、適宜簡潔に触れられればとも考えている。

“not told and told” から “told and not told” へ：「語られること」と「伝わること」の間

（講師）鳥取大学准教授　長柄（ながら）　裕美（ひろみ）

Kazuo Ishiguro の作品においては、言葉として語られない多くの「空白」が含まれており、いかにその空白を埋めていくかが、作品を読む作業の重要な一部となっている。空白を埋めるための手

がかりとして、語りに様々な「反復」が用いられ、「類似性」のみならず相互の微妙な「差異」もまた見逃せない意味を担わされる。こうして *A Pale View of Hills* や *An Artist of the Floating World*（1986）など初期作品においては、蜘蛛の糸を辿るようなイメージの連鎖によって、空白は確実に埋めることができた。つまり、「語られていないが、伝わっていた」のである。しかし、近年の作品になるほど、空白を埋めることは困難となる。自分の置かれた現実を正しく認識することができず登場人物たちが迷走する時間そのものが語られ、「語られているが、伝わっていない」状況に読者も巻き込まれることとなる。Ishiguro は、「語ること」と「伝わること」の間に存在するズレや断絶に強いこだわりを持つ作家と言えるのではないか。初期作品と比較しつつ、近年の *Never Let Me Go* の語りの構造を解きほぐしてみたい。

Never Let Me Go にみる疑似イングリッシュネス
――小説とヘリテージ映画を読む／見る――

（講師）西南学院大学教授　金子幸男（かねこゆきお）

映画 *Never Let Me Go*（2010）は、Kazuo Ishiguro が制作総指揮の一人であったことから、そこに出てくる舞台は、彼がどのような場所をイメージして小説を書いていたのかをよく伝えてくれる。ヘイルシャム小・中等学校はカントリーハウス、コテージはハートフォードシャーの農場とその周りの田園である。どちらもイギリス的なものである。さらにキャシーが介護者、トミーとルースが提供者となってからは回復センターが舞台で NHS を想起させるという点でイギリス的、また最後にマダムと校長先生が住む海辺の建物をキャシーたちが訪問する場面では、アッパーミドルが住む海浜リゾート地が使われている点で、これもイギリスらしさを漂わせている。映画からみる限りは、イングリッシュネスを扱ったヘリテージ映画に属する気がするのだが、正統派ヘリテージ映画からははずれていると感じさせるところがある。サッチャリズムによる、経済効率優先の競争原理導入が社会の不安定化をもたらし、人々は現状への不安を癒すものとして、過去への強烈なノスタルジアを売りにした、イングリシュネスを扱った小説や映画に飛びついた。本小説作品にしても、イギリス的なものが散りばめられているのだが、本格的なイングリシュネスを扱った小説とはどこか違うのである。それは登場人物たちがクローンであることからくると思われる。この違和感は具体的に何なのか、それは何を意味するのかを本発表では見てゆきたい。

Ishiguro 作品における「アート」の役割

（講師）千葉工業大学准教授　三村尚央（みむらたかひろ）

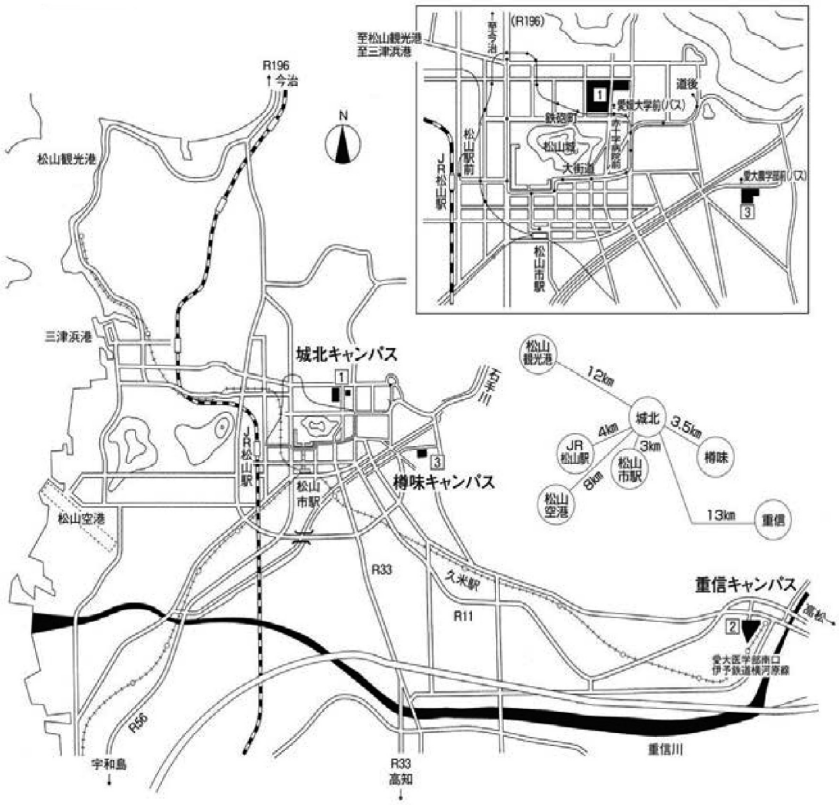
Kazuo Ishiguro の作品を読み解くキーワードとして、「アート」は非常に興味深いもののひとつだ。それは作品中で彼が込める意味の多様さ（もしくは曖昧さ）にあるように思われる。*An Artist of the Floating World* の画家や *The Unconsoled* のピアニストなど主人公に芸術家を採用するだけでなく、*Never Let Me Go* では美術作品が「魂を映し出す」重要な媒体として登場する。だが作品中では芸術はしばしば主人公たちが期待していたような効果をもたらさないし、Ishiguro 自身が「芸術は癒しの手段にはならない」と発言したこともある。その一方で「技術（skill）」という意味でのアートの意義も彼の作品中で追求され続けており、たとえば最新作 *The Buried Giant* を理解する手がかりとしては「記憶術（Art of Memory）」だけでなく「忘却術（Art of Forgetting）」も挙げられるように思う。本報告ではこのような Ishiguro の作品群を「アート」の多義性という点からとらえ直して、

Never Let Me Go を中心とした作品内での関連する要素を分類してゆく。そして語り手の「内面」を外へ表現する媒体としてのアートの働きをフロアと議論してゆければと思う。

―交通案内―

大学所在地

愛媛大学城北キャンパス　〒790-8577　愛媛県松山市文京町 3



大学への主な交通機関

松山観光港・松山空港から JR 松山駅・松山市駅へ

■松山観光港から JR 松山駅

［伊予鉄バス］松山観光港リムジンバス松山観光港から
道後温泉駅前行き　乗車約 20 分　JR 松山駅前下車

■松山観光港から松山市駅

［伊予鉄バス］松山観光港リムジンバス松山観光港から
道後温泉駅前行き　乗車約 26 分　松山市駅下車

■松山空港から JR 松山駅

［伊予鉄バス］空港リムジンバス松山空港から
JR 松山駅前　乗車約 15 分　JR 松山駅前下車

■松山空港から松山市駅

［伊予鉄バス］空港リムジンバス松山空港から
松山市駅　乗車約 23 分　松山市駅下車

JR 松山駅・松山市駅から愛媛大学城北キャンパスへ

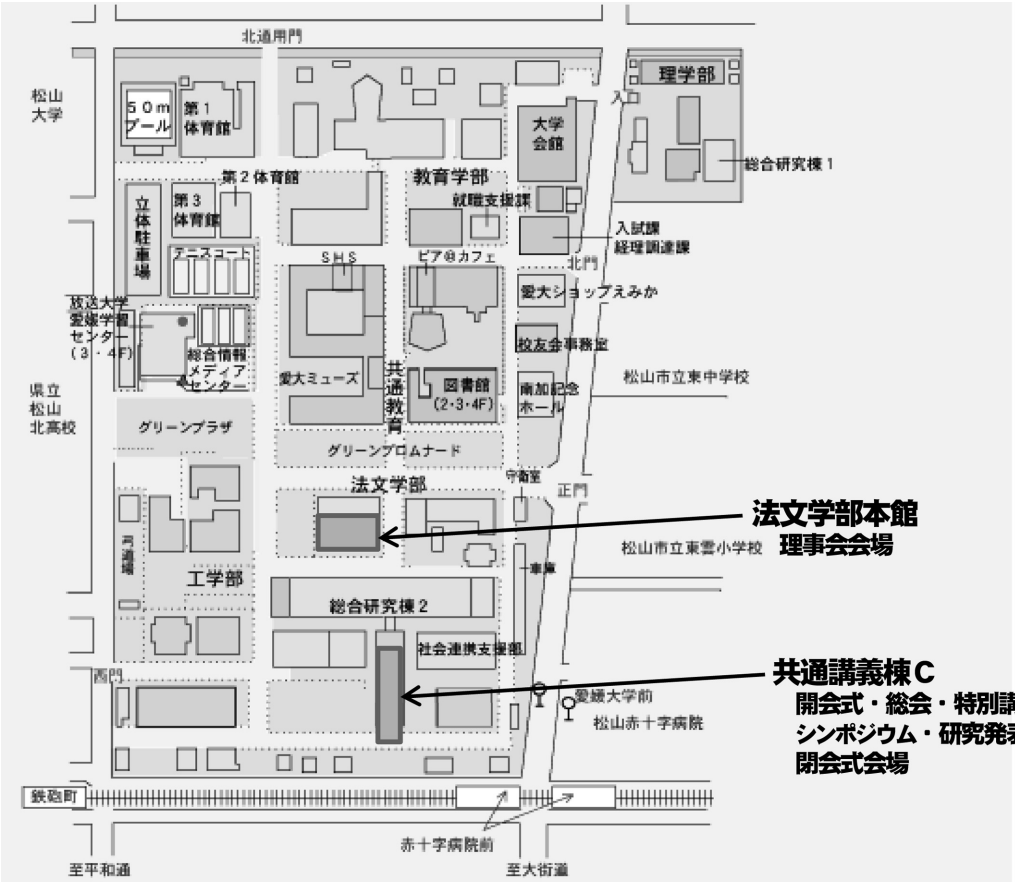
■ JR 松山駅から

［伊予鉄道市内電車］①番環状線　JR 松山駅前から古町回り松山市駅行き　乗車約 15 分
赤十字病院前下車　北へ徒歩 3 分

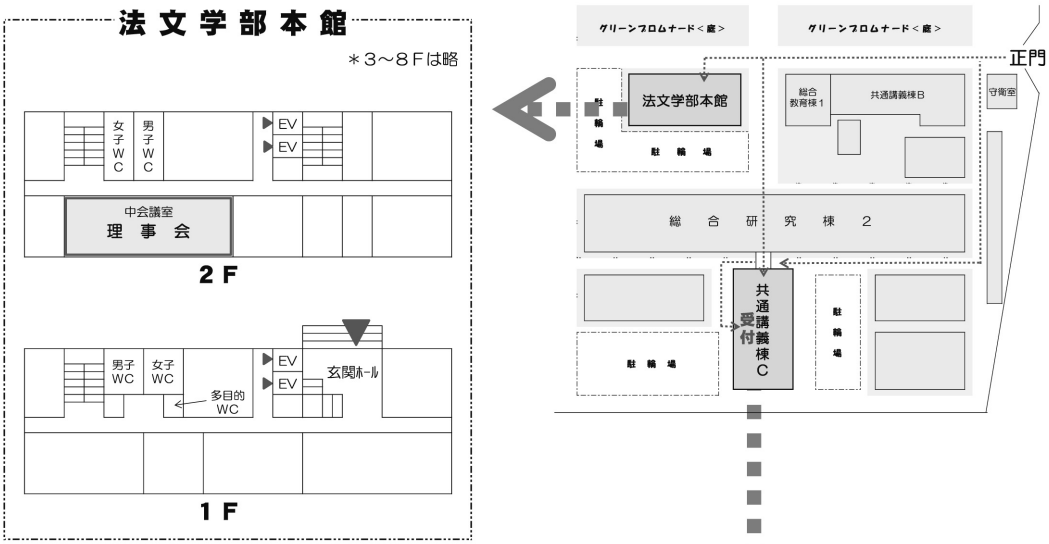
■松山市駅から

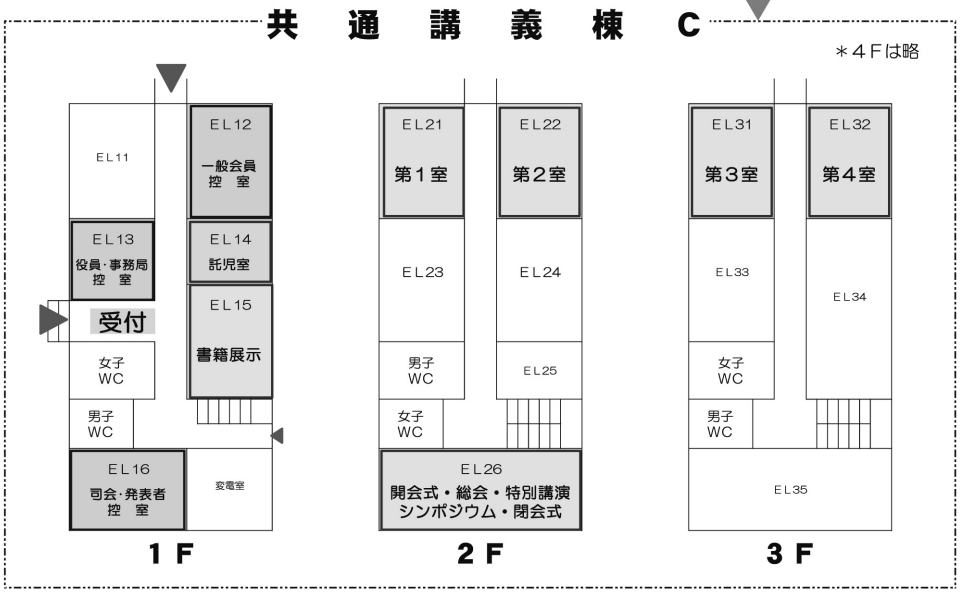
［伊予鉄道市内電車］①番環状線　松山市駅から JR 松山駅前回り　乗車約 22 分
赤十字病院前下車　北へ徒歩約 3 分
［伊予鉄道市内電車］②番環状線　松山市駅から大街道回り　乗車約 13 分
赤十字病院前下車　北へ徒歩約 3 分

愛媛大学城北キャンパス案内図



―教室配置図―


法文学部本館
＊3～8Fは略
女子WC
男子WC
EV
EV
中会議室
理事会
2F
男子WC
女子WC
多目的WC
EV
EV
玄関ホール
1F
グリーンプロムナード＜庭＞
グリーンプロムナード＜庭＞
正門
駐輪場
法文学部本館
駐輪場
総合教育棟1
共通講義棟B
守衛室
総合研究棟2
駐輪場
受付
共通講義棟C
駐輪場


共通講義棟C
＊4Fは略
EL11
EL12
一般会員控室
EL13
役員・事務局控室
EL14
託児室
EL15
書籍展示
受付
女子WC
男子WC
EL16
司会・発表者控室
変電室
1F
EL21
第1室
EL22
第2室
EL23
EL24
男子WC
EL25
女子WC
EL26
開会式・総会・特別講演
シンポジウム・閉会式
2F
EL31
第3室
EL32
第4室
EL33
EL34
女子WC
男子WC
EL35
3F

―会場のご案内―

<table>
<tr><td>理　事　会　会　場</td><td>法文学部本館 2 階</td><td>中会議室</td><td colspan="3">研究発表会場</td></tr>
<tr><td>受　　付</td><td>共通講義棟 C1 階</td><td>入口ロビー</td><td>第 1 室</td><td>共通講義棟 C2 階</td><td>EL21 教室</td></tr>
<tr><td>書　籍　展　示　場</td><td>共通講義棟 C1 階</td><td>EL15 教室</td><td>第 2 室</td><td>共通講義棟 C2 階</td><td>EL22 教室</td></tr>
<tr><td>開会式・総会閉会式</td><td>共通講義棟 C2 階</td><td>EL26 教室</td><td>第 3 室</td><td>共通講義棟 C3 階</td><td>EL31 教室</td></tr>
<tr><td>特　別　講　演</td><td>共通講義棟 C2 階</td><td>EL26 教室</td><td>第 4 室</td><td>共通講義棟 C3 階</td><td>EL32 教室</td></tr>
<tr><td>シ ン ポ ジ ウ ム</td><td>共通講義棟 C2 階</td><td>EL26 教室</td><td colspan="3" rowspan="4">託児室
共通講義棟 C1 階　EL14 教室</td></tr>
<tr><td>司会者・発表者控室</td><td>共通講義棟 C1 階</td><td>EL16 教室</td></tr>
<tr><td>一 般 会 員 控 室</td><td>共通講義棟 C1 階</td><td>EL12 教室</td></tr>
<tr><td>役員・事務局控室</td><td>共通講義棟 C1 階</td><td>EL13 教室</td></tr>
</table>

―懇親会のご案内―

開始時刻：　午後 6 時 30 分
会　　費：　5,000 円（事前 Web 申し込み） / 6,000 円（当日申し込み）
会　　場：　いよてつ会館　クリスタルホール（5 階）
連 絡 先：　〒 790-0004　松山市大街道 3-1-1　TEL.089-948-3456

―食堂のご案内―

生協　（土曜日 11 : 00-19 : 40 のみオープン）